

非売品

平成二九年十月 一日

© 日本国際詩人協会

美しい贈り物は

わたしの胸に守っている

じつに

褶曲（むげうきよく）した

人生の断層をみれば

きつと

似た曲線をもつ

二つがこの世にあるはず

その

表土を暮しが覆っていく

重みが人を強くしていく

初恋悲曲 八

まだ

傷は治っていない

この辺が傷みにふれる

もう

クレーの日記を

読むことができない

もう

カンテ・インスキーの

絵も楽しめない

みな

あの出来事を

思い出させるから

ああ

神様も哀れと

思し召された別離に

そつと

終止符を打てたら

忘れられたものを

でも

誰を恨むことなく

背負って生きた二人

とあ

あの世では話そう

心ゆくまで語りあおう

初恋悲曲 七

ときに

歲月は優しかった

つねに愛されていた

そして

夢と現を行き交う

人生もわたらしい

いや

果たせない願望など

捨て去ればよかったのだ

じつに

互いの約束も

契りもなかった初恋に

きつと

無口な少年は

生真面目な大人になると

だれも

ふたりの明るい

未来を祝福することなく

もし

悲しみを垂れるとすれば

抜け殻のような人の歩み

ああ

無垢な魂を

闇に置き去りにしたこと

初恋悲曲 六

だれか

押し黙って

耐える少年を見たか

だれか

凍った顔の

虚ろな少女を見たか

でも

どんなことがあつても

生きなければならなかった

いつか

一途な少女は

沈着冷静な大人になると

きつと

わたしを気遣い

庇護する人ではなかった

ああ

ただ悲しいだけの

むらさき色の宝珠が

この

わたしの言葉で

輝きを取り戻せるなら

ただ

絹布（きぬ）で磨いて

大切にしまっておこう

初恋悲曲 五

あの

偶然の再会は

やはり幻だったのだ

だれも

そこにはいなかった

なんのよすがもない

よし

だれかいたとしても

心を求め合うひとでなく

じつと

わたしの目を見て

心を砕くひとでなく

いつも

わたしは心のなかで

本当の別れを告げた

すでに

新しい愛の樹が

育っていないければ

もし

孤独の砂漠を

彷徨っていたならば

きつと

想いがあふれて

何も言えなかったらう

初恋悲曲 四

あの

偶然の再会に

驚いたわけでもはなく

わざと

明るく振舞ったのは

不自然だったかもしれない

でも

樹の幹を叩くように

問いかけてみたわたし

いつか

会えると思っていた

その言葉を聞いたとき

なぜか

無言歌の 舟歌」が

ピアノの最後の声だった

もし

この歌がなければ

何があつたというのか

そして

あなたはわたしに

何を残してくれたのか

ああ

何も分け合わず

そつと離れた二人だった

初恋悲曲 参

もう

葬った恋は

一度と甦らない

でも

歌の一節が

いつも胸に響いている

まるで

母の子守唄のように

わたしを眠らせる

だれも

哀れんでくれない

下手な初恋だった

そう

このピアノが歌い

そのチェロが泣いた

あの

六十分の楽曲を

名づけたらどうだろう

ただ

その奏者だけが

聴ける楽音

ほら

目を閉じて

旋律に身を任せよう

初恋悲曲 弐

ただ

路上で影法師が

遊んでいた

ときに

地図の上で

隠れん坊をしていた

でも

影踏みは

決してしなかった

そう

悲しい曲を

離れて奏でていた

いつも

笹が鳴っていた

実相院門跡で

そと

御仏が二人の魂を

抱きとり給った夜

もう

二人の影が

歩くこともなく―

ほら

いまでも 鈴虫が

悲しい曲を歌っている

初恋悲曲 せ

もう

どこを探しても

あの時の二人はいない

もし

すれ違ったとしても

あの時の二人ではない

ほんの

ちとやかな幸せを

分かち合っただけで

じつに

重い悲しみを

背負っただけで

ちとや

甘美

悲哀

悔悟

半夏生の幻影が睫を掠め

放埒に交わした吐息の果ての

虚ろ

後れ毛に垣間見えた哀愁を

振り切るように

馴れた仕草で

最後のギムレットを

抱く

カンペリオレンジ

波野 仁

裏返った記憶の果てに

鱧えたピアノの音色が浮かぶ

遠い旋律に沈む横顔に問う

最初の夢

グラスにルージュを印す間の

逡巡

乾いた微笑 傾げた首筋

沈黙が浸透する

カンペリオレンジ包む指に

真夏の残り香

白い喉を過ぎる

流れていく少女よ

花開く時を夢見て

ほほえみを浮かべ

周りくのやさしい香りが

誰をも包み込み

喜びで満たせていたのに

密やかな逢瀬も記憶の中に閉じ込めて

少女は流れていく

蕾のまま流れていく少女よ

長岡紀子

もう少し　もう少しだけ待って

と　固い蕾はそつと囁く

まだ明けきらぬ　つーんと冷たい空気を

全てを生かす陽の光が

少しづつ　少しづつ

そつと優しく和らげ

諸手を差し伸べる

花は刻々と進む　時　に合わせて

かすかにその花茎を揺すらせ

五弁の花びらを　押し開く

乳房の蕾も開ききらず

川の流れのまま

心の隅に

過去からの

贈り物をとじこめる

束の間の

しあわせを いまをならぶこと

初恋

秋月夕香

星空に

遠くとんでいく旋律

あの人の吹いた 草笛は

崇高な純粋さを 呼びとまし

そのリズムは

宇宙に届く

野も山も

静かに眠って

聞き入っている

彼は誰かと付き合っていたらしい

しかしそのときがなかったのだとも

何も伝えず何もはなさず

幼いと言ってもそこには　しらないという名の

残酷な罪

人生のクレーズが

永遠に口を開けている

父が急にそれを知って学業半ばである事

彼の家は肺結核の人が居る事を告げて

わたしをとがめたのです

それきり私は会わなかった

苦しくて

そんな私を父は映画に連れてゆき

進路は別れを示していた 通学の道で

ある日彼はベストアイムで私を罵倒して 去っていった

二十年もたって まだ独身の彼だった

めったに人と話さないのだと

余りにたわいない恋だったのに

私のためだとは思わない

初恋のクレビス

下田喜久美

いつもリーダーで明るかったのですね

いつか私の悪い所を あなたは指摘した

中学校の ホウムルームの時間

心の中に入ってきたのはあなたが初めてでした

何時だったかしら好きだといったのは私でした

卒業式も終わった日

あなたは急に私の家の前にたっていた

どうして

嫌いなはずだったのでしょう

私は舞いながらきつと輝いていたと思います

夏のおわり 私は再び入院した

そのひとは 一度だけ見舞いに来て

病室の窓から七色の虹を眺めていた

私は ほかに何も望まなかった

そのひとの講義はわかりやすく

そのひとのペッションに引き込まれ

苦手な幾何学が優になった

放課後 通り雨の校庭を駆け抜けた

後ろから走ってきた そのひとは

私の襟に透明のビニールを結んで引き返した

長髪の襟足に掌たる

あの やさしい通り雨は

いつまでも 私の心を濡らした

そのひとが

おとなの女と行くのを見た

白い傘の女と行くのを見た

通り雨

司由衣

ぽっかりと白い雲の橋

校庭に天使が降りてきた

Freeze 一瞬 目が眩み動けない

何か やさしい影に匿われていた

私は地の底に沈んでゆく

私はこのまま死んでゆく

不意に肩を叩かれ

驚いて薄目を開けると

長髪の似合う青年が微笑んでいた

われて ふきあれる

はじめての夏草のうえ

しずまない青い太陽おいかけて

初恋

井上良子

まぜてまぜて かきまぜる

いのつかみよしのなり

めばら骨の田へい側

ちいせなといき はかりすこ

微熱のからだ つま先立つ

ゆびそきが ちきゅうから

はなれてういて

わたし そのうち われるから

もう降らないでほしいと思った

降れば二人の間は

すこし遠のいてただ思ったんだ

話していたいって

どうすればいいのかわからずに

冷たい雨は

ひたひたと

体の中にしみこんでくる

雨の日に遅刻してきた生徒のように

そこに座り込んでいる

雨の日に

加納由将

会いたいと思った

どこまでも続く長い坂道で

躓くほどに

急いで会いたいと思った

曇っている

空さえ晴れ渡るように

エネルギーを爆発させて

会いたいと思った

遠くで虹が 一瞬崩れても

会いたい気持ちに変わりはなくて

夕立ちのふりはじめを思い出す

渴いた瓦を染め抜いていく雨は

記憶の宝石箱に納められ

水の星の中で

薄く光を放つ

恋の奥深い焰は

まだ知らぬ

遠いピアノシンモ

青と紫の

マリアージュに溶けた

その透きとおった

アメジストの玉を

生涯忘れることはないだろう

初恋 アメジスト」

上村多恵子

未来がまだ

神秘的なまでも

憧れのなかに

満ちていたとき

ただ見つめ合った

恥じらっただけで

軋み合う

アメジストの光の屈折

ときめきと

素っけなさか

何も告げないまま

銀のスプーンの動かし方や

聞きたいこと 言いたいことがあるものを

君が いま いてくれさえしたら

君が いま いてくれさえしたら

君が いま いてくれさえしたら

こんな詩を書かずにすんだらろうに

それ誰のこと なんのこと と

詮索されずにすんだらろうに

いま 君が いてくれさえしたら

スカートの形のことや悩むこともなかつただらうに

君が いま いてくれさえしたら

つり革にぶら下がっているぼくに 黙って

鈴蘭の花を手わたし

自分は先に降りて 窓からその花を受け取った

あの鈴蘭の花は

その後 どこに生けられ どうなったのか

尋ねることもできただろうに

そしたら 君は いつものように

眉をよせ 控えめに微笑みかけるだろうに

もし 君が いま いてくれたら

もし 君が いま いてくれたら

穂高の見える河童橋の清流や

松本城の小ぶりの城郭や

知恩院楼門の太い柱の蔭でのことや

湖北の里の祠のことや

鈴蘭の花

村田辰夫

ああ いま 君がいてくれさえしたら

今世紀の初めにパリで流行した 「ジ・ユベキ・ユロット」 スカートが

どんな形をしていたかを 教えてくれるだろうに

わたしの専門は人体の曲線を測定して

身体にぴったりの紙型を作り出す技術理論にあるのだ

などと 主張したりはしないで

邪魔くさかっても 写真などを探して

見せてくれただろうに

もし 君がいてくれさえしたら

ああ いま 君がいてくれたら

戦後 ゑゅゝゑゅゝ詰めの電車のなかで

夕焼け

小湖舎 伸行

実が熟れる瞬間なんて 掴みようがなかった

君が透明な宝石を生み出したから

他の色は意味を失ったんだ

君の心は音となり 僕の胸を何度も叩いた

舞台に上がることをためらう僕は、

焦がれる様を見せまいと顔を背けた。

幾つもの季節が覆い被さったとしても

あの日の夕焼けが沈むことはない

偽物

小湖舎 みなみ

笑うあなたの顔を小さく疑った

笑わないあいつをつまらないと思った 笑うあなたの顔が 一瞬凍るのが好きだった

笑わないあいつの顔は冷たくて好きじゃなかった

笑うあなたの顔があざとくて好きだった

笑わないあいつの顔は単純で好きじゃなかった

笑うあなたの顔がやさしくて好きだった

笑わないあいつの顔は自分本位で好きじゃなかった 笑うあなたの陰が好きだった

笑わないあいつの影は薄かった

笑うあなたに自分の思いを重ねた

笑わないあいつが僕だった

ひととなる
時の風

**

幼い時を
守ってくれた
兄のようなひと
心の中に広がる
青い海

(五行詩 組詩)

青い海

中澤 京華

思い出の扉
開けば
柔らかな
輝き放ち
蘇るひと

**

海辺で
波飛沫と一緒に
きらめく
あなたの笑顔
優しい瞳

**

見つけた
淡い光を
閉じ込める
抱き締めるように
包み込む

**

さよならの
季節を越えて
かけがえのない

青い海	中澤 京華
偽物	小湖舎 みなみ
夕焼け	小湖舎 伸行
鈴蘭の花	村田 辰夫
初恋 アメジスト」	上村多恵子
初恋	加納 由将
初恋	井上 良子
通り雨	司 由衣
初恋のクレバス	下田喜久美
カンパリオレンジ	波野 仁
初恋悲曲	すみくらまりこ

第二回 美しい日本語で詩を読む会

朗読詩集

2017.10.1

